

宮田加久子著

『きずなをつなぐメディア』

——ネット時代の社会関係資本』

評者：野村 一夫

■本書の意義—社会関係資本への注目

インターネット研究において、一つの要となるのが、オンライン・コミュニティにおいていったい何が生じているのかという問題である。その微視的なやりとりの仔細ではない。それが社会においてどのような効果を持っているかという問題である。これがなかなか検証できないというのが従来のインターネット研究のネックであったと思う。

そんな中で本書を読んで、問題圏が明確に見えてきたような思いがした。それは、本書が二つのテーマの関係について研究していたからである。一つはインターネットのオンライン・コミュニティ、もう一つは社会関係資本である。そのため、インターネット論としては独自の視点からのユニークなものになっており、社会関係資本の研究としても特異なものになっているのだが、とりわけ社会関係資本概念の導入によってインターネット研究はその社会的効果を明確に議論できるようになったと言ってよい。

■本書の概要

本書の概要を追ってみよう。

第一章「社会関係資本とは何か」では、研究史をたどりつつ、コールマンやパットナムやリンの社会関係資本研究を整理して、社会関係資本

本を「信頼や互酬性の規範が成り立っている網の目状の社会ネットワークとそこに埋め込まれた社会的資源」（22頁）と定義する。信頼には「厚い信頼」と「薄い信頼」があり、前者は特定の他者に対する個別的信頼であり、後者は一般他者に対する一般的信頼である。後者が広い協調行動を促進する点で注目される。

第二章「情報縁—インターネットでつながるきずな」では、電子メールによる交流型のコミュニケーションと、オンライン・コミュニティとが検討されている。前者においては、携帯メールとの比較において、PCメールが弱い紐帯を含めた多様で広いネットワークと関連が深く、携帯メールは近くにおいてサポートしてくれるような強い紐帯をつなげている。

それに対して、オンライン・コミュニティにおいては、多様な資源が蓄積されるが、コミュニティによってさまざまである。強い紐帯を強化して同質性の高い資源を蓄積するという結束型社会関係資本を形成することもあれば、弱い紐帯を拡大した多様性の高い資源を保有する橋渡し型社会関係資本を形成することもある。結束型は対面的なコミュニティでも可能であることを考えれば、インターネットの特性を生かすのは橋渡し型である。しかし、オンライン上においても、コミュニティの参加者間の紐帯が強まるにつれて資源の同質化が生じ、コミュニケーションを促進するとともに、排他的にもなる。結束型への傾斜があるということらしい。そこをどのように開放的なものにしていくかが運営上の課題になるわけである。

第三章「オンラインでの互酬性の規範と信頼の形成」では、オンライン空間においていかにして協力が可能かが問題にされている。もともとオンライン・コミュニティでは「ただ乗り」が生じやすい。多くの人が、あえて情報提供などの労をとることをしないのである。ここで生

じているのは、非協力の利益が特定個人に独り占めされ、非協力の弊害が集団全体に拡散する公共財型のジレンマである。

コロックによると、このジレンマを乗り越えるためには以下の六つの要因が必要であるという。(1)一般化された互酬性への期待、(2)オンライン・コミュニティへの愛着や関与、(3)他者への共感的関心、(4)アイデンティティの表出、(5)自己効力感、(6)コンサマトリー性の動機づけ。自分の献血行為がいつか自分にも還ってくるであろうと期待するように、集団やコミュニティにおいて、自分の貢献がいつか何らかの形で還流するという信頼が「互酬性の規範」である。これは橋渡し型社会関係資本の一形態である。

著者は、これらの要因を二つのオンライン・コミュニティの調査によって確認している。消費者間オンライン・コミュニティとオンライン・セルフヘルプ・グループである。後者は育児サポートのコミュニティの調査について報告されている。

前者では一般化された互酬性への期待が見られ、橋渡し型社会関係資本の形成が確認された。匿名性が高く、コミュニティへの関与が低く、対等の立場でのコミュニケーションがなされているコミュニティの場合、開放的で弱い紐帯が形成され、一般化された互酬性の規範が形成されていると考えることができる。

それに対して、後者においては、悩みを公開することで参加者はコミュニティへの関与が高くなり、強い紐帯が形成されやすい。資源の同質性が高く、ともすればネットワークが閉鎖的になる傾向性があるという。

このようなオンライン・コミュニティにおいて、信頼は重要な役割を果たす。とりわけマクロレベルでの信頼（一般的信頼）が重要である。これがあれば、個人が利益を得る機会が多くな

り、協力活動を活発化するからである。この種の信頼を形成しようとするのが「評判システム」である。オークションサイトやエキスパートサイトや商品レビューサイトで採用されている評判システムは、過去の言動を評価して現在進行中の言動が信頼可能かどうかを査定する点ではサンクションの役割を果たす。しかし、肯定的フィードバックが圧倒的に多くなる点などの問題がある。

第四章の「社会関係資本が変える暮らし、地域、社会」では、オンライン・セルフヘルプ・グループの効果が社会関係資本との関連で評価されている。基本的にはエンパワーメントになっているとの評価であるが、社会関係資本の影響についても言及されている。

第五章の「社会関係資本の豊かなインターネット社会を目指して」では、オンラインとオフラインの連携の重要性が指摘されている。そして、インターネットを用いて社会関係資本の豊かな社会を築くためには、個人レベルではメディア・リテラシーの育成が必要であり、集団レベルでは水平なネットワーク構造を持つ集団が作られていく必要があり、適切な公共政策が必要だとしている。以上が本書の概要である。

■社会関係資本概念とインターネット論

インターネット論として評価すると、オンライン・コミュニティの社会的効果について社会関係資本概念を導入して議論に明確な準拠枠を用意したこと、そして「互酬性の規範」や信頼概念によってコミュニティを評価する試みを行っていることが新鮮である。ごく最近、刊行されたものでは、池田謙一編著『インターネット・コミュニティと日常世界』（誠信書房、2005年）においても社会関係資本と関連させる議論が見られるが、しばらくはこのラインの議論がインターネット論を引っ張っていくだろう。

私もパットナムの社会関係資本の考え方に影響を受けて『未熟者の天下』（青春出版社、2005年）を出したばかりだが、一種の公共哲学・社会構想論として社会関係資本の議論は注目に値する。これは一種のコミュニタリアンの論調に組するもので、グローバリゼーションの容赦ない津波の中でいかにして「社会」を再創造するかを考えるとときに有力な「導きの糸」になる。そして、インターネット上のさまざまなコミュニティは新種の「中間集団」として、NPOやボランティアと並んで、かなり重要な役

割を果たすものと考えられるのである。私自身としては『インフォアーツ論』（洋泉社、2003年）で抽象的・実感的にしか議論できなかったものが何であったかがよくわかり、大いなる収穫であった。

（宮田加久子著『きずなをつなぐメディア—ネット時代の社会関係資本』NTT出版、2005年3月刊、221頁、定価2800円＋税）

（のむら・かずお 国学院大学経済学部教授
法政大学大原社会問題研究所研究員）

●「流動化する世界経済」と「混迷化する日本経済」への分析視角を確立！
村上和光・半田正樹・平本厚編著 菊判・三三四頁・五〇四〇円（税込）

転換する資本主義：現状と構想

第1部 現代資本主義とグローバル化

1 情報資本主義としての現代資本主義……半田正樹
2 グローバル資本主義の幻影……村上和光
3 現代にとつて貨幣とは何か……国際通貨の行方……石橋貞男
4 資本主義的生産の総過程と有効需要の原理……亀崎澄夫
5 エレクトロニクスと現代資本主義・支配的産業の歴史的位相……平本厚

第2部 転換期にたつアジアと日本

6 日本の「長期不況」と産業・消費構造の変容……栗田康之
7 バブル崩壊後における日本経済の長期低迷と企業金融の変容……工藤昭彦
8 アジア経済の成長構造とリスク……藤野富一
9 日本型福祉国家の特質と限界——後発資本主義国へ成熟社会——……斎藤忠雄
10 イギリス新自由主義の政策体系……越智洋三
11 スウェーデン福祉国家システムの再編とその歴史的意義……岡本英男
12 もう一つの道E.U.の基底にあるもの——社会的市場経済——……高橋英男
終 転換期の資本主義とオルタナティブ——経済学方法序説——……大内秀明

●「効率的の相の下」に開発を優先する「資本の文明化作用」を批判する
内田弘著 AS判・三七二頁・三二五〇円（税込）

新版『経済学批判要綱』の研究

資本主義が意図せずして「真実の富としての自由時間」の可能性を生みだしてゆくダイナミズムを解明した名著、複刊！
田口雅弘著 AS判・二四四頁・五二五〇円（税込）

●連帯運動期から体制転換期へという歴史的転換点に迫る！
ポーランド体制転換論 システム崩壊と生成の政治経済学
ポーランド社会主義体制が崩壊し新たな自立の道を模索する過程（一九八〇～一九九〇年）を現代経済史と政治経済学の視点で分析。
大久保武著 菊判・三三〇頁・四七二五〇円（税込）

日系人の労働市場とエスニシティ

地方工業都市に就労する日系ラジアル人
地方都市に就労する日系人労働者の存在を、労働市場分析とエスニシティ研究を統合させた視点で構造的・実態的に解明。
●本邦初訳出版……加盟国の批准は成功するか
小林勝監訳・解題 細井雅夫・村田雅威訳 AS四二〇頁・二九四〇円（税込）

欧州憲法条約

二〇〇四年二月に欧州連合官報に掲載された欧州憲法条約（全四四八条）の邦訳である。監訳者による機密な解説を付す。

御茶の水書房 113-0033 東京都文京区本郷5-30-20 電話03(5684)0751
ホームページhttp://www.ochanomizushobo.co.jp/